

放射線看護の専門職育成に向けて
——長崎大学・福島県立医科大学共同大学院
「災害被ばく医療科学共同専攻」における教育・研究——

Toward fostering radiological nursing professionals:
Education and research in Nagasaki University/
Fukushima Medical University Joint Graduate School Disaster and
Radiation Exposure Medical Sciences Joint Degree

浦田 秀子¹ 新川 哲子¹ 末永 カツ子²

山田 智恵里² 田中 祐大³ 大石 景子³

南原 摩利⁴ 高橋 真菜美⁴

Hideko URATA¹ Tetsuko SHINKAWA¹ Katsuko SUENAGA²

Chieri YAMADA² Yudai TANAKA³ Keiko OOISHI³

Mari NAMBARA⁴ Manami TAKAHASHI⁴

1 長崎大学大学院医歯薬学総合研究科

2 福島県立医科大学大学院医学研究科

3 長崎大学大学院医歯薬学総合研究科災害被ばく医療科学共同専攻修士課程

4 福島県立医科大学大学院医学研究科災害被ばく医療科学共同専攻修士課程

1 Nagasaki University Graduate School of Biomedical Sciences

2 Fukushima Medical University, Graduate School of Medicine

3 Division of Disaster and Radiation Medical Sciences,

Nagasaki University Graduate School of Biomedical Sciences, Master Course

4 Division of Disaster and Radiation Medical Sciences Joint Major,

Fukushima Medical University Graduate School of Medical Sciences, Master Course

長崎大学と福島県立医科大学は2016年4月から共同大学院「災害・被ばく医療科学共同専攻（修士課程）」を開設し、被ばく医療科学分野の専門家の育成をめざし教育を開始した。

本交流集会では、共同大学院の設置の目的および教育・研究の実施体制、学生の学びについて報告し、放射線看護の専門職育成に向けて討論した。

新川氏より、長崎大学の福島県への復興支援の取り組み、新たな学問体系である「放射線災害復興学」の考え方を説明された。放射線災害サイクルに必要なエビデンス、ツール、政策、人材を提供するものであり、放射線被ばくによる健康影響に対して恐怖・不安のある住民に適切に対応できる人材の育成が期待されると述べられた。

末永氏、山田氏から、修学学生の状況、被災現地で求められる支援および支援に対応するために必要な知

識・技術の習得を意図とした講義内容について報告があった。さらに、福島の被ばく経験をモンゴルでの地域住民活動に活かすアクション・リサーチが紹介された。

引き続き大学院で学ぶ学生4名が発表した。

田中氏は頭頸部がん患者の看護実践から課題研究へ取り組み、放射線治療を受ける患者の家族の放射線被ばくや治療に対する思い・認識として、対象者のもつ放射線の捉え方や放射線のもつイメージが明らかになった。これらの結果および研究のプロセスでの学びを日々の業務や今後の研究へ活かしたいと話された。

大石氏は放射線部での勤務体験から患者や医療職の被ばくや防護に関心が高まり、研究を実施したことや、がん放射線療法看護認定看護師取得までの経緯を述べられた。さらに放射線看護に関する探究と、放射線災害時の看護を学びたいという思いから高度実践看護師をめざして大学院に入学したことを話された。

南原氏は原発被災地における支援活動に携わる中で放射線の知識がなければ住民に深く寄り添うことができなと感じ、大学院に入学したことを話された。また、放射線の知識は、看護教育の中に必須であると強調された。

高橋氏は福島で抱えている問題から、「放射線に対する不安」「除染作業員」にアプローチし、研究へ取り組んだことが話された。また、社会に還元する重要性を学んだと述べられた。

学生は被ばくの対象になる人々に対して、放射線防護および放射線リスクコミュニケーションの専門知識を基盤に対象に寄り添いながら不安や疑問に対応できるよう放射線看護の学修を蓄積していると考えた。

会場から、大学教員および社会人として修学を支援する看護部長から修了後の期待も含めて本コースの意義について述べられた。

予想以上に多くの方にご参加いただき、放射線看護の専門職の人材育成が喫緊の課題であることを再確認した。